

こうした社会の変化に対して、地方の方の捉え方あるいは地方の企業の方の捉え方というのはどういったものなのでしょうか。そのことをまず一言お答えいただいて、プレゼンテーションに入っていただきたいと思います。



西村教授

(西村) 西村です。

確かに、地方というのは、もしかしたら変化を捉えるのが遅れているかもしれません。三重県は、製造業でうまくいっている北のほうは、旧態的な意識にまだ引っ張られています。自動車がいいので、製造業のほうに引っ張られる。同時に先行して疲弊している地域もあり、そうした地域から、「何か、だめだよな」ということに気づいて動きが起こっている、そういうこともあります。

それから、割と地方のほうが多様な状態になっているかもしれないというのが、私が各地を歩いていて感じるところです。それも含めて、この後ご紹介させていただくつもりですが、先ほどの藤波さんのお話がとても説得力があったとあって、その話を三重県に照らし合わせると、地域のなかでも、そういう人口の移動とか選択のなかに、もしかしたら、高度な面白い仕事のところに女性が集まる、集まったところが何か新しい変化が出て変わりつつある、こんな感じを受けています。

(藤波) 分かりました。そのままプレゼンテーションをお願いいたします。

(西村) それでは、私からは「地域イノベーションの重要性」というテーマでお話をさせていただきます。

#### 〔私の経歴〕

経歴は細かくは申し上げませんが、私は、大学の教員になったほうが後で、もともとは民間企業で働いていた人間ですので、大学人としては少し変わったキャリアを持っています。

資料右下に、ジェネティックラボと書いてありますが、私は大学教員になる前はベンチャー企業の社長でした。それもバイオベンチャーの社長をしていました。ですから、かなり変わったキャリアで大学に来たということを、まず一つお伝えしたいと思います。

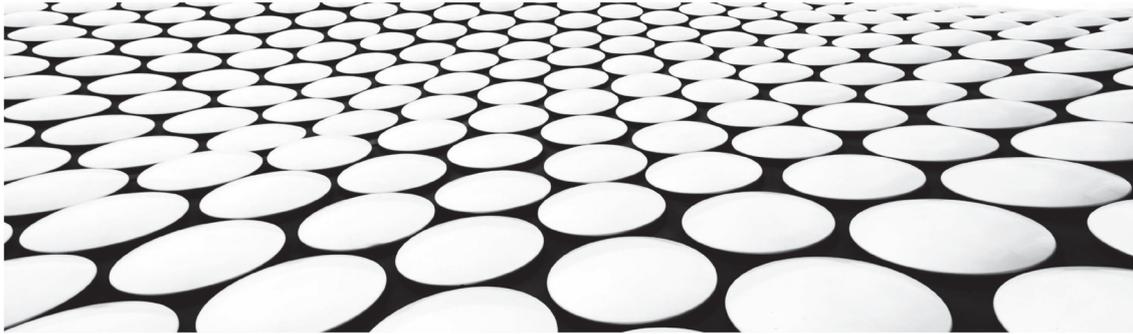
それと、うへのほうにもものすごく風向明媚な、これは三重県南部のリアス式海岸の写真ですが、とても景色のいいところなんですけれども、私はここの出身です。恐らく日本のなかでも最も疲弊している地域の一つだと思います。こういった出身地で生まれ育ち、都会に出て、最後はベンチャー企業の社長までやり、そこから三重県に戻って、地域をもう一度見直したときに、大学教員として考えたことをお話しして、ディスカッションに参加したいと思います。

#### 〔日本政府が進める地方創生について〕

このスライドは、先ほどの藤波さんがおっしゃっていた地方創生について、国の資料の一部を引っ張ってきたものです。地方から三大都市圏に行く人を止めないと人口減少が進み、とくに女性の大都市への流出が加速するので、それを止めなければいけないとされています。

# 地域イノベーションの重要性

西村訓弘  
Norihiro Nishimura



## 私の経歴

### 学歴

- 1983年 三重県立宇治山田高等学校 卒業
- 1987年 筑波大学農林学類生物応用化学主専攻 卒業
- 1995年 博士（農学・筑波大学） 授与

私の出身地 南島町（現南伊勢町）



### 経歴 \*産業界でのキャリア（1987年から2004年までの17年間）

- 1987年 株式会社神戸製鋼所生物研究所・研究員
- 1996年 Pall Corporation (米国)/日本ボール株式会社・研究員
- 1998年 日本グラクソ株式会社遺伝子研究部・研究員
- 1999年 株式会社ラボ ジェネティックラボが事業部・主任研究員
- 2000年 株式会社ジェネティックラボ・主任研究員
- 2002年 株式会社ジェネティックラボ・代表取締役社長

### \*アカデミアでのキャリア（2004年から）

- 2004年 三重大学医学部産学連携医学研究推進機構・特命教授
- 2006年 三重大学大学院医学系研究科・教授
- 2009年 三重大学・学長補佐（社会連携担当）
- 2013年 三重大学・副学長（社会連携担当）
- 2016年 三重大学大学院地域イノベーション学研究科・教授 \*現職
- 2020年 宇都宮大学学術・教授（クロスアポイントメント制兼務）\*現職



北海道大学との連携で創業した国立大学発ベンチャー第1号である株式会社ジェネティックラボの事業立ち上げを行った。（2000年7月1日）



株ジェネティックラボ 設立パーティ

確かにその通りなのですが、どこに書いてあったか、正確には覚えていないのですが、そこにはこういうことが書いてありました。「地方創生が実現すれば地方が先行して若返る」、というものです。「何だろう、これ」、とずうっと気になっていたんですけども、私自身も、地方創生という言葉が出る前、15年前に三重県に戻ってきて、それで、地べたをほうように地域のなかを見渡していると、何か一方的

### 日本政府が進める地方創生について

**日本政府が取り組む「地方創生」**

東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけ、日本全体の活力を上げることを目的として、2014年9月3日の第2次安倍改造内閣発足後の総理大臣記者会見で発表された一連の政策を「地方創生」と呼ぶ。

**まち・ひと・しごと創生のための考え方**

(出典) 日本創成会議・人口減少問題検討分科会「ストップ少子化・地方元気戦略」より

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局中から引用

**地方創生の意義**

地方創生が実現すれば地方が先行して若返る。

↓

地方創生を実現することで新たな日本の姿を創造する

に疲弊していくんじゃないよねということに気が付きました。その時、この「先行して若返る」というのが何となく響いたんですね。

いつまでも高齢化は続きません。高齢者の方は、いずれはお亡くなりになります。その時、もし地方に若い人が残っていれば、その人たちがマジョリティになるはずです。だから、そういう意味で、新しい日本の姿というのは、この過疎化、高齢化を超えた先にあるんじゃないかというのが、私のなかで一つ考える起点になっています。

#### 〔三重県での南北格差〕

少し三重県の事情をお話ししますと、三重県は縦に長い県で、北側は名古屋に接しているため、トヨタとかホンダの主力工場があり、東芝等々の半導体の工場があり、北は工業化が進み、経済的にもいいわけです。翻って南は、一次産業しかない、あとは観光ですね。今回のコロナで伊勢神宮とかは大変な目に遭いましたけれども、そういう状況です。

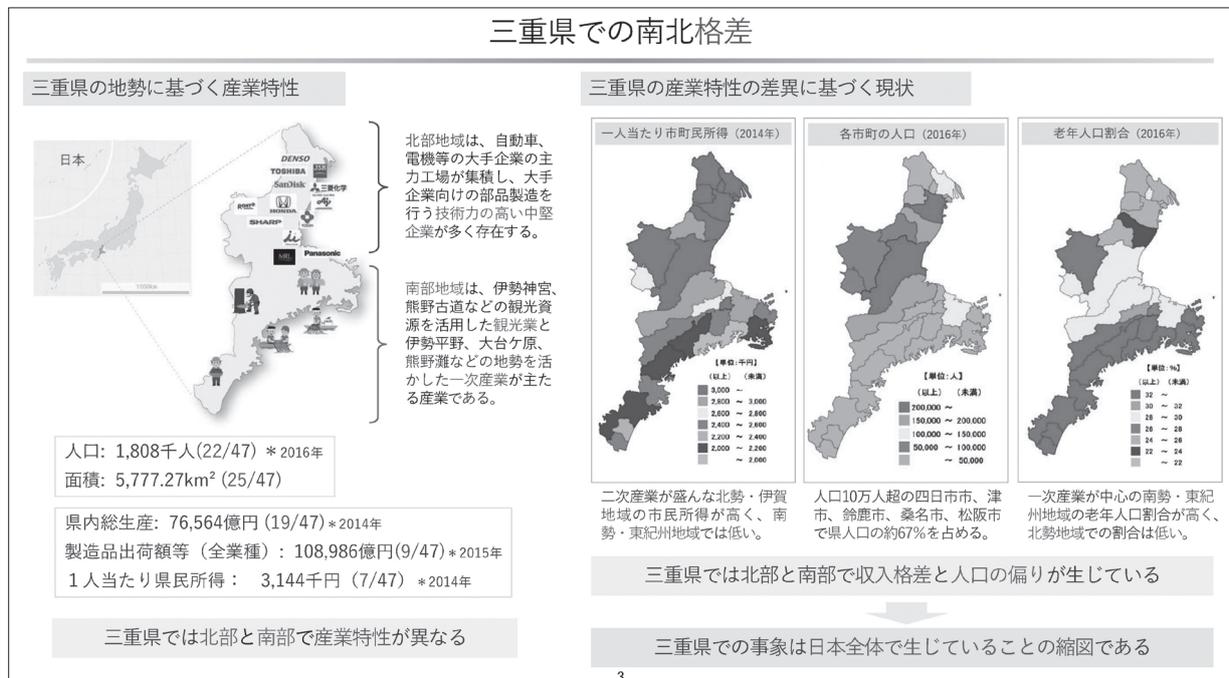
県全体としてみれば、日本のなかでも平均的な県であり、工業出荷高になるとかなり上位になり、収入になるとトップクラスになる。割と豊かな県なんだということです。

ただ、地域別にみれば、三重県内には大きな南北格差が見えてきます。ここに色付けした地図が三つありますが、これは、左の方から、市町民所得、その次が人口、その次が老年人口割合ですね。今、三重県では29の市と町がありますが、この市町を色付けして示しました。これらの図をみれば一目瞭然なのですが、南北で明らかな差異があります。所得は北が高い、人口も北に集まっている。その結果、南で高齢化が著しく進んでいるということになります。

三つの地図のうち1番左の図のなかで、1カ所だけ所得が最も低いという意味で薄く着色してある地

域があります。これが南伊勢町というところですよ。実は、ここが私の出身地です。ですから、こういう最も疲弊したところに生まれた人間として、この三重県の問題は無視できないと思い、三重大学に入ってから、この南北格差について徹底的に考えようとしています。

この現象は、先ほどの繰り返しになりますけれども、藤波さんのほうで地方と中央との比較のような分析があったと思いますが、こういった日本の格差の縮図が三重県内にもあるということです。こうしたことは、三重県だけではなくて、石川県などでも聞いたことがあります。また、現在、私、栃木県でも教鞭をとっていますが、やはりそこでも県のなかで格差が生まれているなど、いろんな地域で見られる現象です。こういったことが地方の各地で起こっているということです。地方でこの問題を解くことができれば、もしかしたら日本全体の格差の問題が解けるのではないかと考えています。



### 〔過疎地域は衰退し続けるのか?〕

過疎地域は衰退し続けるのかということについて考えてみます。これを人口の変化という指標でみると、私の生まれた南伊勢町は、私が生まれたころから人口減少が始まっていました。もう消滅するんじゃないかと、絶えず言われてきたような地域です。しかし、実際にこの地域をじっくり歩いてみると、この右側に示したような結構元気な人たちがいます。

幾つか紹介しますと、これは、田所さんというミカン農家を作る「せとか」という1個1,000円のミカンです。地元で頑張って磨き上げれば、ミカンもここまでいくということです。これを千疋屋に直接売り込んでいて、収益性も高い。

次は、民宿をやっている羽根さん。彼は、伝統食を少し改良して楽天で売ったら、ばか売れした。

漁師の橋本さん。彼は、けんかばかりしていた漁師を東ねて、「伊勢まだい」という一つのブランド

をつくりました。

地方にも、知恵と工夫で結構頑張っている人たちがいる。ただ、この人たちが地域で孤立しているのではないかと思い、まちづくりリーダー研修ということで、私が彼らを集めては、地域で何ができるかというディスカッションを繰り返していました。

こうしたことを通じ、地域って結構変わっていくということが分かってきて、実は、私たちは勘違いしているのではないかという思いに至りました。もちろん、昔のままやっていたらだめです。ただ、今の時代に合わせて考え方を変えていくことができれば、何か変わってくるのではないかということです。そうやって生き抜いている人たちがいるということも分かってきました。



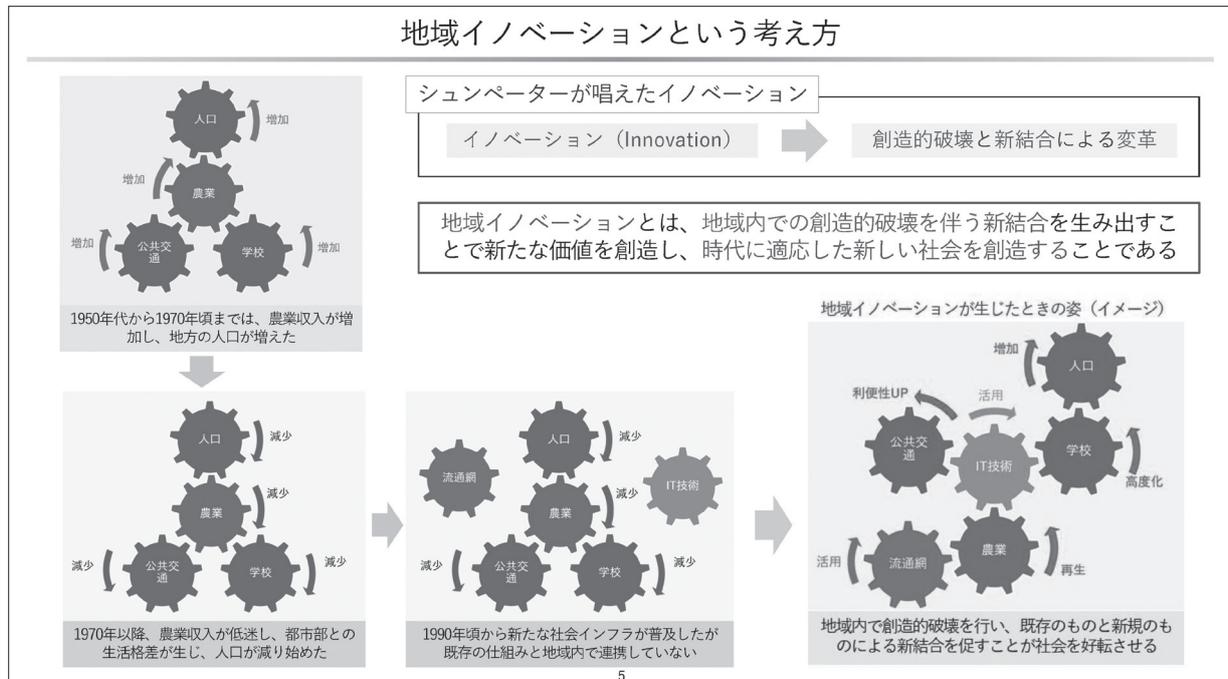
〔地域イノベーションという考え方〕

そこで、私は地域イノベーションという考え方を述べるようになりました。イノベーションというのは、シュンペーターの定義によれば、創造的破壊と新結合による変革だと読み取れます。

社会のつながりを歯車で例えました。左上の歯車、昔は、地方は農業、一次産業がよくなったら、人口も増え、学校も増え、公共交通がよくなりました。私の子どもの頃はこんな感じでした。でも、いつの間にか、総体的に日本が豊かになってくると、農業とか一次産業は収益が上がらなくなります。そうなれば、人口も減り、学校も減り、公共機関もだめになる。でも、地方の人口減少が明らかとなった1990年以降でも、日本という国は、暮らしを便利にする様々なインフラを末端まで整えてくれるんです。先ほどのIT技術はもちろん、流通網も。どんなところでも、クロネコヤマトが来てくれます。ただ、そうした新しいインフラと昔のやり方がかみ合わないことがあります。

そこで私たちは、いったん、地域のなかで全部ばらばらにして、1番いいやり方でもう一回組み直せ

ば、新しい富が生まれるんじゃないかと考えたわけです。それが地域のなかでイノベーションを起こす。つまり、地域イノベーションということで、地域内での創造的破壊を伴う新結合、これを生み出して、新しい時代に適した社会をつくらう。こんなことをやっています。



#### 〔地域イノベーションの事例 辻製油株〕

具体的に、三重県にある辻製油という会社の事例を紹介します。ここは、石油を燃やして蒸気をつくり、その熱で食用油を搾る会社です。

日本でトップレベルの食用油を搾る会社なのですが、東京などの都会をみて、効率性ばかり追い求めて商売をしていたら、いつの間にか、油を燃やして油を搾るようなやり方になってきてしまった。でも、後ろの山を見たら荒れ放題。そこで、誰も見向きもしなかった森林から木材チップを採ってきて、石油の代わりにしてみる。まさに新結合をやったんですね。林業が衰退して、森林には価値がないという固定概念。ボイラーは石油で燃やすものだ、この固定概念。これをいったん全部壊す。森林×搾油工場を、結合させたわけです。

これはCO<sub>2</sub>削減という話ではなくて、実は、ものすごいコストダウンになるんですね。石油が高くなるという現状と、木材資源を使うということに補助金も出るというのもあるんですけども、200億円ぐらい売り上げている会社のなかで数億円コストダウンができる、すなわち儲かるわけです。いま、こうしたことが起きている。

### 地域イノベーションの事例 辻製油(株)

#### 辻製油(株)の取り組み



三重県松阪市にある企業であり、1947年に国産なたね搾油専門工場として、辻製油所を創立し、食用油の精製・販売を開始した。その後、食用油精製残渣からレシチン、セラミド等、機能性素材を独自技術で製品化するなど、食素材の総合メーカーとして成長を続けている。  
\*2010年に三重大学内に研究室を設置



6

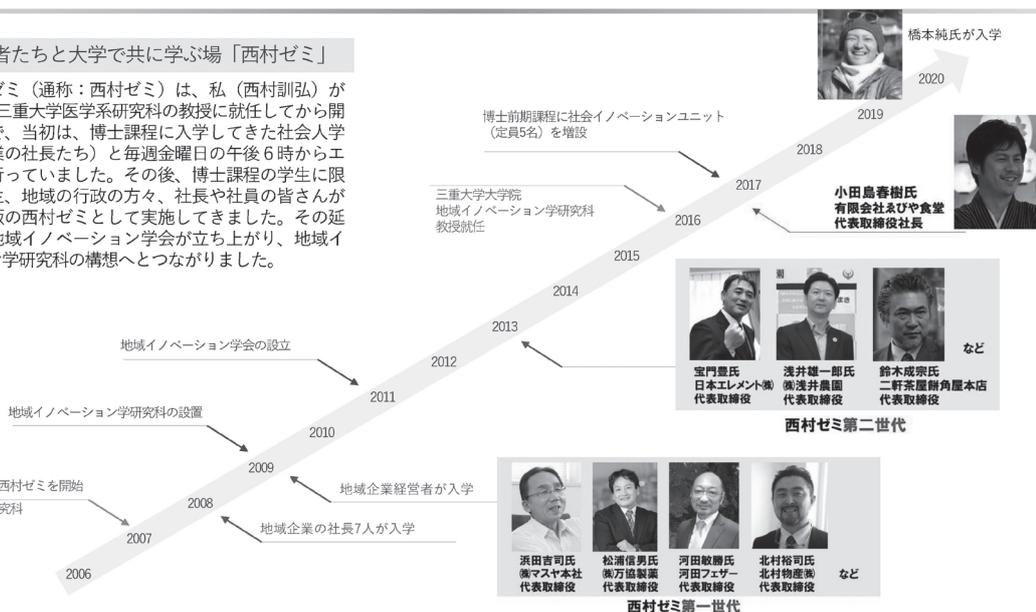
#### 〔地域の社長たちと行ってきた取り組み（西村ゼミ）〕

三重大学で私はもともと医学部の教授だったんですけども、私は地域におけるそうした新しい動きに気が付いて、そこから地域イノベーション学研究科というのをつくりました。当然、フレッシュな学生も入れるんですけども、その研究科に地域の社長たちに来てもらうようにしたんです。彼らが学ぶ

### 地域の社長たちと行ってきた取り組み（西村ゼミ）

#### 地域の経営者たちと大学で共に学ぶ場「西村ゼミ」

西村研究室ゼミ（通称：西村ゼミ）は、私（西村訓弘）が2007年1月に三重大学医学系研究科の教授に就任してから開始したもので、当初は、博士課程に入学してきた社会人学生（地域企業の社長たち）と毎週金曜日の午後6時からエンドレスで行ってました。その後、博士課程の学生に限らず、学部生、地域の行政の方々、社長や社員の皆さんが集う、拡大版の西村ゼミとして実施してきました。その延長として、地域イノベーション学会が立ち上がり、地域イノベーション学研究科の構想へとつながりました。



7

ことによって、いろんなことに気づき、それを基に変わっていくことになります。

つまり、社長を覚醒させることによって、働く現場が変わる。これによって社会を変えていく。そのように考えて、今、三重大学地域イノベーション学研究科には、ここに掲げたような、地元でも相当有名な社長たちが来ています。大学院ですから、もちろん学位を取ることを目指します。ただ、博士号を取るのが目的ではなくて、博士号を取る過程で、物事を考え、自分たちで新しいものをつくってもらう。これを10年くらい続けることによって、本当に変わってきました。私の目標は社長100人を博士にすることです。社長100人博士化計画を立てているんですね。今、これをやっていくことで、地域が大分変わってきたという雰囲気を感じています。

#### 〔地域イノベーションの事例 うれし野アグリ(株)〕

これは、先ほどの辻製油と、私の教えた学生の一人である浅井雄一郎さんという浅井農園の社長が結合した話です。トマト栽培は、石油を使ってハウスを加温するため、ものすごくコストがかかります。辻製油は、木材を燃やしてつくった蒸気の熱で油を搾る仕組みを導入しています。実は、油を搾った後に蒸気は高温のお湯になるのですが、辻製油のなかでは用途がないため、そのまま捨てていました。熱を捨てている会社と熱が欲しいトマト農家、これを地域のなかでくっつけることで、日本で最も収益性の高いトマト工場になりました。こんなことがわずか2～3年でできるんですよ。地方でも、考え方を換え、今の時代に最適なやり方をすれば、圧倒的な富が生まれる。これが、もしかしたら、今の時代の本当の姿じゃないのかと思うわけです。

### 地域イノベーションの事例 うれし野アグリ(株)

辻さんと浅井さんの出会い

うれし野アグリ株式会社  
URESHINO AGRI CO., LTD.

うれし野アグリ(株) トマト植物工場  
蒸気&工場排熱 パイプライン  
辻製油(株) 植物油工場  
バイオマス ボイラー  
間伐材 木質チップ

木質バイオマス資源のカスケード利用モデル事業 (2013~)

うれし野アグリ株式会社は、辻製油から排出される植物油脂製造に使用された蒸気由来の90°Cの熱水を隣接するトマト栽培ハウスに送り、冬の暖房エネルギーとして利用する木質バイオマス資源のカスケード利用の仕組みで、高収益型農業を実現した。

約100名の新規雇用を創出し、国内最高レベルの高収益型農業（反収2,300万円＝稲作農業の150倍以上）を実現した。

8

〔地域イノベーションで目指す姿〕

こういうことを、私たちは地域イノベーションと言っているんです。よく言うイノベーション、技術革新と訳してしまったのもあったんでしょうけれども、GAFGAのような形でものすごい会社をつくるというイノベーション、私たちはこれを大文字のイノベーションと言っていますが、そうではなくて、地方の末端でも、今あるものをもう一度見直して、新しいものと組み直すだけ。それでもイノベーションは起こる。これを小文字のイノベーションと言っています。この小文字のイノベーションが地域のなかで、例えば三重県の南部、三重県のある地区のなかで、小さいイノベーションが群発するだけで、地域社会はがらっと変わってくる。

そうやって社長が覚醒して変わっていけば、そこには新しい働く場が生まれる。先ほど藤波さんがおっしゃったように、魅力的な働く場があれば、そこには人が残ります。藤波さんの話を聞いて、確かにそうだなと思ったのは、やはりそうしたところで活躍しているのは女性が多いですね。また、覚醒した社長の下について活躍している人たちにも、女性が多い。いま、三重県で、こんなことをやろうと思っています。

シュンペーター自身も、イノベーションというのは群発すると言っています。今、私たちはイノベーションの現場をみているのではないかと思っています。

私からのご紹介は以上になります。

### 地域イノベーションで目指す姿

---

私たちが地域イノベーションを通して目指す地域の姿

Innovationとは、新しいアイデアから社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらす自発的な人・組織・社会の幅広い変革を意味する。

地方が目指すべきイノベーションの姿

小文字のinnovationの集積で社会を大きく変革する

『シュンペーターが提示した新結合が出現する姿』

\*シュンペーター—孤高の経済学者—伊東光晴・根井雅弘著 岩波新書を参照

シュンペーターによれば、新結合は群生して現れるという。なぜなら、「一人あるいは数人の企業者の出現が他の企業者の出現を、またこれがさらにそれ以上のますます多数の企業者の出現を容易にするという形で作用する」からである。

Apple  
Alphabet (Google)  
Amazon  
Microsoft  
Tesla  
...

➔

INNOVATION

(藤波) 西村さん、ありがとうございました。

先ほど私は、人口移動というものに対してかなり悲観的な見方、とくに地方にとって悲観的な見方を、お話しさせていただきましたけれども、必ずしもそうじゃないんだ、というのが西村先生のお話だった